

機関番号：12601
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19720161
 研究課題名（和文） 日本中世の寺社と在地社会—地域社会における寺社の社会経済史的機能について—
 研究課題名（英文） Study on the relations between temples and local societies in medieval Japan—The social and economic functions temples in local societies—
 研究代表者
 及川 亘（OIKAWA WATARU）
 東京大学・史料編纂所・助教
 研究者番号：70282530

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本中世における寺社とそれを取り巻く地域社会の関係を、地域の人的ネットワークや生産関係に基づいて分析することにより、寺社が地域社会に対して担った社会経済史的機能を考察した。南都の薬師寺の事例では、寺家の経営の成り立ちと周辺の地域社会の成り立ちとが相互に依存する形で論理化されていること、京都の今宮神社の事例では、神社の祭礼が氏子町の都市共同体の成立に重要な役割を果たしたことなどが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, it is clarified that temples and shrines in medieval Japan have the social and economic roles to maintain the local societies around them. In the case of Yakushiji-temple in Nara, the management of its organization was mutually related to the maintenance of the local society around it. And in the case of Imamiyajinnja-shrine in Kyoto, its festival played an important part in the formation of the town's community of Shiba-omiya-cho, which was worshipping the shrine as a guardian deity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,100,000	450,000	2,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史・中世・寺社・在地社会・薬師寺・芝大宮町・今宮神社・算用帳

1. 研究開始当初の背景

本研究の代表者・及川は、所属する東京大学史料編纂所の研究事業の一つとして、法相宗・薬師寺（奈良県奈良市）所蔵史料の奈良文化財研究所との共同調査に参加していたが、その調査史料を利用して、薬師寺とそれに隣接する律宗・唐招提寺の関係を、寺家の運営・経営の側面から考察したことがある（及川「戦国期の薬師寺と唐招提寺」、勝俣

鎮夫編『寺院・検断・徳政』山川出版社所収、2004年、以下前稿とする）。

両寺は地理的には隣接して立地するものの、それぞれに宗派の異なる古代寺院としての由緒を持ち、基本的には独立した寺院として理解されてきたため、それまで相互に関連付けて考察されることはなかったが、寺家組織・運営と周辺の在地社会との関連に注目すると、両寺を一体として理解しなければなら

ない側面があることが分かった。すなわち、一般に中世の南都寺院は、古代以来の官僧の系譜をひく白衣の寺僧と遁世僧である黒衣の律家の両方を内包し、それぞれが独自の機能をもって寺の運営に関わっていたことが知られるが、唐招提寺の白衣僧の多くが薬師寺からの出向の僧であり、唐招提寺内・領内の検断などを含む寺院運営の一定の部分が、薬師寺によって担われていたことを明らかにしたのである。

また、同じく南都の古代寺院としての系譜を持つ西大寺については、白衣の寺僧は大部分が近在の有力農民に出身者で、実家の寄進地を所領とする在地性の強い存在であり、黒衣の遁世僧は独自の所領を持たず、信者による寄付を主な財源とする在地性の弱い存在であることがすでに指摘されているが、寺家経営の基盤となる所領に注目すると、薬師寺・唐招提寺もまた、寺僧本人または実家である有力農民が祈祷料などの名目で寄進した田地によって支えられていること、それらの寄進主である有力農民は薬師寺と唐招提寺で別々に存在するのではなく、同一の在地社会にあって重なり合うものであることを確認した。

そして上述の薬師寺・唐招提寺のある種の一体性は、周辺地域が薬師寺寺辺郷として一体的な空間として把握されていることによるのであり、在地社会は単に薬師寺領として領主（薬師寺）の支配を受けるのではなく、寺家に子弟を入寺させ、土地寄進によって寺家に経済的基盤を与えることで、在地社会の秩序維持（検断権の行使）などの社会的役割を寺家に対して期待したことを指摘した。

2. 研究の目的

しかし前稿では、薬師寺の寺家運営の総体と、寺家運営と在地社会の間で相互に取り結ばれる関係についての具体的な検討が不十分で、一般に寺家が担うべき社会的機能が在地社会との関係性の中でいかに論理化されるかについては課題が残った。

そこで本研究は、領主としての寺社と在地社会の関係を、単なる支配・被支配関係ではなく双方向に規定しあう相対化されたものと考えて、地域における人的ネットワークや生産関係の中で、寺社がどのように社会的な機能を果たすか具体的に検討することによって、寺社の地域社会における社会経済史的役割とその歴史的意義を考察することを目的とする。

あわせて、統一政権による兵農分離策の一環として、朱印地の給付によって寺社が鉢植え化され、中世以来の在地社会との有機的な関係が絶たれた中で、寺社の社会経済史的な機能がどのような消長を遂げるか、すなわち在地社会と寺社が互いに「自立する」過程を、

寺社の組織・経営の変化にも注意しながら跡付けることも射程に入れる。

3. 研究の方法

まず、それまでに研究を進めていた薬師寺について、在地社会との関係性の中から地域において薬師寺の果たしている社会的機能とその原理を追求し、次いで、畿内やその近国における寺社にも対象を広げ、寺院・神社組織と寺家・社家経営に関する個別例を集め、それらを比較検討し総合する。それにより中世の地域社会における寺社の社会経済史的役割を担保する一般的な論理を探る。

そのために本研究では次の三つの柱を立てる。

(1) 先ず中世の薬師寺の運営・経営の全体像把握しなければならない。それは大きく次の三つに分類して考察することが可能であるとの見通しを持っている。

① 薬師寺別当領からの収入：本来これが薬師寺の基本収入となるべきものであるが、遠隔地の所領の多くが退転したり、興福寺の末寺となることによって薬師寺別当が興福寺僧により相伝されるようになると、薬師寺の寺家の直接収入としては期待できなくなる。そこでこれを寺家経営の費用として支出してもらうために、別当に対していかに働きかけるかが問題となる。薬師寺自体には関連史料が残っていないので、興福寺関係の史料などを調査する。

② 薬師寺寺辺領に賦課する反銭・反米などによる収入：寺家の収入としてはこれが基本になるとと思われる。これをどのように集め、どのような使途に支出するかが問題となる。薬師寺所蔵の評定記録などを主な分析対象とする。

③ 特定の法会・用途に付属する田地からの収入：「三十講田」「燈明田」や故人の供養の費用を支出するための田地など、特定の使途を持つもので、一年交代の納所（収納担当者）によって独立採算経営される。薬師寺所蔵の算用帳や土地売券・寄進状を主な分析対象とする。

これらを総合することで、寺家経営の総体を把握し、これが薬師寺寺辺郷の在地社会の成り立ちとどのように相互に作用するかを考察する。

(2) 近世における薬師寺と周辺の在地社会の関係の変質を考察する。薬師寺の近世史料群は膨大であり、なおかつ整理途上であるので、それらを全面的に活用するのは困難であるが、ここでは最近になって発見された17世紀初頭から近世の全期

間にわたる寺家経営に関する史料（算用帳）を利用する。それらを撮影・データ化し分析することで、近世の寺院組織と寺家経営を考察し、中世の在り方と比較する。

- (3) 薬師寺の他に畿内およびその近国で、寺社とそれを取り巻く地域社会との関係を考察するのに適した事例を調査する。調査対象としては、南都寺院の他に、京都周辺の寺社や、尾張の熱田社などを念頭に置いている。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」の(1)について、中世の薬師寺について関連史料の収集を行い、上述の①～③に即して寺家運営について検討し、次の結論を得た。

- ① 薬師寺別当領からの収入は修二月会など古代以来続く薬師寺惣寺の基本法会を支える経済基盤とされ、在地社会に対する古代寺院としての権威を支えるものであった。またその権威は在地社会にとっても後の③を成り立たせるためには必要なものであった。
- ② 反銭・五月会銭・反米・井料・堤料など寺家による寺辺郷統治に基づいて賦課される負担は、寺家そのものの運営を支え、在地社会に対しては領主としての役割を担保するものであった。
- ③ 各種法会や灯明方のように特定の目的のために設定された財務部門は、既に本研究の前提として明らかにしたように、それらが寺辺郷の土豪・有力農民の入寺と寄進によって成り立っていた。その点で在地社会との関連が最も深い部分である。それらの個別財務部門の所領の成立は、寺家にとっては経営の安定化の一助となるが、寺家経営そのものが在地の勢力の一定の介入を受けることを意味した。一方で一旦寄進された所領は寺家の責任において経営され、部門によっては年番で収納担当者が決定されるため、寄進地であっても必ずしも寄進者の思うままになるわけではないが、寄進を行う在地の土豪・有力農民にとっては、寺家に子弟を送り込むことでイエの庶流を存続させつつ、また年番による収納担当者の決定に参加することで、寺家経営の循環の中に自らの経営を位置づけ、寺家の領主としての社会的機能を自分たちのために利用したのである。

以上、①～③により、領主としての中世薬師寺と在地社会の関係は、寺家の経営のためには在地社会の支持が必要であり、一方在地の勢力にとっても寺家の領主としての機能が必要であるという、表裏のものであること

が明らかとなった。

この部分の考察は、研究期間中に論文としての発表が間に合わなかったが、寺家経営の成り立ちと在地社会の成り立ちが相互に論理化されているという点で、ユニークなものと考えられる。

(2)について、史料編纂所と奈良文化財研究所の薬師寺所蔵史料の調査に参加し、参加者の協力を得て、新たに発見・整理された近世の算用帳簿類を本研究期間中に元文二年の分まで撮影をした。これは薬師寺が幕府から朱印地を与えられた慶長八年から江戸時代を通じて残されており、近世を通じて薬師寺の構成員を知ることができるとともに、特に近世初期のものは、中世から近世への薬師寺の寺家経営の変質を如実に物語る貴重なものである。全体は当初予想した以上に膨大で、撮影自体が終了しておらず、データ化もまだであるが、可能なところから分析に取り掛からなければならないと考えている。

また、研究期間中に調査・収集した南都関係の未刊史料のうち、春日社司祐範による日記を抄出した「春日社旧記抜書」から、元和九年の徳川秀忠・家光の南都見物の際の、興福寺・春日社を中心とした南都社会の対応について知ることができる個所を抄出して翻刻紹介した（「元和九年将軍父子上洛関係記録記事抄」）。

(3)について、先ず尾張熱田社の門前郷および港湾の開発に携わった東西両加藤家のうち、西加藤家の史料群について、現在寄託先となっている名古屋市立博物館と所蔵者（西加藤家の末裔）の協力を得て全77点の調査・撮影を行い、併せて熱田郷の現地踏査も行った。この史料群には多くの土地売券が残されており、中世末期以降の西加藤家による熱田門前郷の開発は、織田氏や徳川政権などの世俗権力の支持のもと、土地集積と表裏のものとして進展したことが判明したが、ここからは西加藤家による開発と熱田社との直接的な関連は見出すことができなかった。熱田の場合は港湾の開発も問題となるが、17世紀以前の状況はほとんど不明である。わずかに東加藤家が所在したとされる地に「羽城」という地名が残されて、海に突き出した形で東加藤家の屋敷が構えられ、港湾施設も備えていたであろうことをうかがわせるのみである。

次に、研究期間中にたまたま古書市場で発見され、史料編纂所所蔵となった「芝大宮町文書」を整理し、その史料紹介（「東京大学史料編纂所所蔵「芝大宮町文書」の町入用関係史料について」）と分析（共著『中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ—』、口頭発表「町の経済—上京芝大宮町の算用帳より—」）を行った。

これまで、京都上京芝大宮町関係の史料は、

京都市歴史資料館に寄託されている芝大宮町共有の算用帳が知られており、『史料京都の歴史』7に部分的に紹介されていた。ところが、この史料群には欠失部分があり、『史料京都の歴史』編纂時(1980年)には行方が分からなくなっていた。今回その失われた部分が見つかったのである。これにより、芝大宮町の近世前期までの財務を検討する素材が揃った。

そこで、既知の芝大宮町共有「芝大宮町文書」(京都市歴史資料館寄託)の算用帳類を調査し、新出の土地帳簿を併せて利用することにより、中世末から近世初頭の芝大宮町の財務構造について分析し、芝大宮町の空間復元を行った。京都の個別町の財務構造については、すでに冷泉町に関する研究が知られているが、今回はそれを参照しながら、芝大宮町での支出は町共同体が維持しなければならない最大の施設である木戸門の整備や、氏神である今宮神社の祭礼に関する費用が大きな部分を占めていることを確認した。

また特に町共同体の収入に力点を置いて分析した結果、町共同体の収入はおおむね i) 町人のメンバーシップに関わる銭の徴収、ii) 富裕町人による寄付・彼らからの借金、iii) 町共同体の資産運用による収入、iv) 「くくり」と呼ばれる門並みに徴収する銀・銭、の四種に分類でき、町人の経済規模に関わらず均一に徴収される i) や iv) の逆進性は、ii) が機能することによって費用負担の平準化が図られたことが明らかとなった。

また、町共同体による銀・銭の徴収の論理について検討する中で、芝大宮町の自立した財政の成立には、町の氏神である今宮神社が一定の役割を果たしていることが確認できた。しかしそれは宗教的な論理を基礎とする特定の教徒集団によって個別町の共同体が構成・維持されることを示すのではなく、祭礼を通じて作り出される町人相互の精神的な紐帯が、共同体の地縁性を担保する方便として論理化され、現実の世俗的な人的結合や町の自立した運営を支える機能を果たしていること示すものである。

以上、本研究では主に南都と京都をフィールドとして、在地社会における寺社の社会経済史的機能を考察した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

及川 亘、元和九年将軍父子上洛関係記録記事抄、将軍父子上洛と将軍宣下の政治社会史的研究 (東京大学史料編纂所研究報告2010-2)、査読無、2011年、pp. 24-87

及川 亘、東京大学史料編纂所所蔵「芝大宮

町文書」の町入用関係史料について、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、第19号、2009年、pp. 94-116、

[学会発表] (計1件)

及川 亘、町の経済—上京芝大宮町の算用帳より—、中世都市・流通史懇話会、2007年8月29日、若狭ふれあいセンター(福井県小浜市)

[図書] (計1件)

及川 亘(高橋慎一郎・千葉敏之他と共著)、中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ—、東京大学出版会、2009年、pp. 183-214、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

及川 亘 (OIKAWA WATARU)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：70282530